

經濟論叢

第137卷 第3号

平田清明教授記念號

献 辞	池 上 惇	
マルクス管見	菱 山 泉	1
比較経済学序説	伊 東 光 晴	12
現代資本主義と経済政策の課題	清 水 嘉 治	33
マルクスのインダストリ論	山 田 鋭 夫	54
スミス世界史像の再検討にむけて	野 沢 敏 治	71
ケネー『経済表』「原表」の マナー・フロー分析	浅 野 清	91
資本における所有・序説	八 木 紀一郎	114

平田清明 教授 略歴・著作目録

昭和61年3月

京 都 大 学 経 済 学 會

資本における所有・序説

八 木 紀 一 郎

I Property matters!

19世紀前半の多数の共産主義的、あるいは社会主義的著作家とのマルクスとの差異は、私的所有の問題を静態的な財産の不平等関係（富めるものと貧しいもの）としてではなく、資本という運動する私的所有において、いいかえれば、資本—賃労働という生産関係においてとりあげたことにある。「市民社会の解剖は経済学に求められなければならない」として、青年時代のマルクスが経済学に研究領域を移したのは、こうした問題関心からであった。

しかし、経済理論の領域において〈所有〉を問題にするということはどういうことであろうか？ リカーディアン社会主義者やブルードン主義者達は、私的所有は是か否か、といった権利論争を、経済学の世界にもちこもうとした。たとえば、1825年の匿名の一パンフレット（『労働擁護論』）でホジスキンは、スミスの分業観にたって、資本の実体は「共存的労働」に他ならないから、労働者階級に労働生産物の全体を返すことが正義であると論じたし、また、1840年の『所有とは何か？』でブルードンは、古典派の労働価値説によるなら所有は論理的に不可能になると論証しようとした。それらはたしかに資本主義が創出・普及させている通俗的所有観念に対する批判としては興味をそそるものではあったが、経済理論の課題を「近代経済社会の運動法則を解明する」ことに置くマルクスの観点からは、とても前進とはいえなかった。彼らの議論は、経済理論上の諸概念（この場合、労働価値説）をその理論体系から分離して取り出して、論理的矛盾、あるいは現実との矛盾を云々するにとどまったからである。マルクスにとってまず重要なのは、現実の事態の理論的理解であり、そ

のために、〈所有〉を資本主義経済の前提・過程・結果にかかわるものとして、その運動を解明する理論体系の中にどのように組み込むかということが、本来の理論的課題であったからである。

そこで、経済理論における〈所有〉の取り扱い方について考えてみると、最もポピュラーなのは、所有制度を経済機構の機能する枠組みとして承認し、理論の予備的説明の段階でとりあげはするものの、経済過程の具体的内容にかかわる部分ではその作用・影響についてはほとんど触れないというものである。こうした扱いは、所有制度は経済理論の主題というより、むしろ、その前提となる与件であるという自己限定に基づくこともあるが、実質的には、所有権の配分の様式は、一定の条件のもとではその結果には影響しないという、いわば「所有ヴェール」観とでもいうべき見方によるものと思われる。

「一定の条件」というのは、主要には取引の自由であるから、これは市場経済の視点から〈所有〉制度を把握したものであり、その際、特に、各当事者が自分の状態を改善するために自由に取引を行いうる限りは、出発点がどのようなものであれ、最後には、ある意味で社会的に「最善」（厳密に言えばパレート最適）の状態が達成されるという論理に注目したものである。それは、アダム・スミスの「見えざる手」の摂理から、新古典派の資源の効率的配分論にいたるまで、市民的経済学の主流と結びついた見方である。この「所有ヴェール観」は、〈所有〉の具体的形態を経済理論の枠外に置く場合でも、それが市場経済に適合した形態であることは自明視しているのであるから、実質的には「私的所有」を普遍的とみなした立論といってよい。マルクスが彼の経済学研究の出発点において、「国民経済学は私的所有という事実から出発するが、この事実を解明しようとしなさい」〔『経済学・哲学草稿』〕と喝破した所以である。

このような「所有ヴェール論」を前提するかぎりには、近代の「所有」の問題は、「生産」ときりはなされた「分配」の領域における問題であると考えられるであろう。いうまでもなく、その代表は J. S. ミルであるが、マルクスがそのような二分論を拒否したことはよく知られている。分配されるものが生産手

段であるとすれば、分配関係は直接に生産関係を規定するし、消費手段の分配も、労働力の再生産を通じて生産関係を間接的に規定する。いや、生産手段が非労働者の間で売買され、労働者向け消費手段が賃金による買い戻しの方式で分配されるというのは、それ自身がマルクスにとっては資本制生産関係の本質をなすものであった。資本制生産関係は、それに対応する領有分配関係を自己のうちに含むのであり、生産に影響することなしに自由に変更しうる分配は、ありうるとしてもマージナルな部分にすぎないであろう。分配を既存の生産物の分配とのみ考えるのは間違いであって、それは現在および将来の生産物の生産と分配をも包含する。分配が再生産の一環である以上は、それはむしろ生産関係と一体をなすものとしてとらえられるべきである。〔草稿『経済学批判序説』『資本論』第Ⅲ巻第51章〕

しかし、こうしたマルクスの批判は、まだ資本制的生産関係の本質的な形態を指摘するにとどまるものであり、その上にたって展開される運動機構にまでは至ってはいない。だが、経済理論としては、こうした運動機構の内部において、「所有」の帰結を問題にすべきではないだろうか。その意味で、マルクスの経済理論は、ミル流の生産・分配の二元論がまだ保存している「所有ヴェール」観とは反対に、〈所有は生産の中にきりはなしがたくはいりこんでいる Property matters!〉ということにならなければいけないのではないだろうか。

本稿では、以上のような問題関心にもとづいてマルクスの〈資本〉概念を私的所有者の利害関心にかかわらせて考察してみたい。青年時代のマルクスは、「無所有と所有の対立」を「労働と資本の対立」におきかえて出発したが、ここでは、両極のうちの後者、すなわち、生産を決定する所有としての〈資本〉の項をとりあげたいのである。問題は、〈資本〉が〈私的所有〉であるということはマルクスの経済理論にとってどのような意味をもつのかということである。そのためには、私はまず、スミスを代表とする古典派と対比してマルクスの〈資本〉概念を特徴づけ、その後に『資本論』第Ⅰ巻に登場する「資本家」

像についての批判的検討をおこなうことによって、この課題に接近したい¹⁾。

II 〈資本〉観におけるスミスとマルクス

アダム・スミスの『国富論』は、近代の経済社会の機軸を資本蓄積において捉え、近代の経済学に思考の基礎的な枠組みを提供した。そこでは、資本家的生産関係の特質が認識されると同時に、「自然的自由」が体制的に保障されるという条件のもとで予定調和的な経済像が描かれた。彼は近代の経済社会は階級に分かたれ、所有の不平等が存在していることを認めるが、にもかかわらず個人の自由な営利活動は社会の生産的可能性をくみつくし「全般的な富裕」を実現する点では、国家的統制よりもはるかに強力であると論じた。この所論は、彼を「所有ヴェール」観の創始者とするのに相応しいであろう。

スミスとマルクスは近代の経済を〈資本〉にもとづく生産として捉え、その社会を資本制的生産関係を軸とした階級社会と捉える点では、共通のベースの上に立っている。にもかかわらず、スミスの描いた経済像は、恐慌と窮乏化を強調したマルクスのそれとは180度異なっている。この分岐は一体何に起因するものであろうか。この設問に答えるためには、両者の経済理論についての本格的検討が必要なことはいまでもないが、分岐の発端を彼等の〈資本〉についての認識に求める程度のことは、こうした初歩的段階でも可能であろう。

そこで、スミスの〈資本〉把握を『国富論』第2篇を中心にまとめてみると次の三点になると思われる。

S1. 近代社会では高度に発展した分業によって生産がおこなわれるから、生産が完成し販売されるまでの期間、生産の材料・道具を提供し、労働者の生活を維持する各種資財のストックが蓄積されていなければならない。

1) 古典派の資本概念とマルクスのそれとの対比については、私は「マルクスと貸金基金」『岡山大学経済学会雑誌』13-4 (1982) 年でとりあげた。また、本稿全体、とくに貨幣資本を主導的形態としてマルクスの資本概念をとらえる点について、「資本回転の資本主義の形態—マルクスにおける資本と時間(Ⅱ)—」『同』、16-2 (1984) を参照されたい。

〈資本〉の生産における機能は、こうした「生産的労働」の維持にある。

S2. 〈資本 capital〉とよばれるのは、私人が蓄積したストックのうち、直接の消費用に留保される部分を除いた、彼がそれから収入（利潤）を得る目的で運用する部分である。

S3. 資本所有者は、その資本を維持し収入を増加させるためには、浪費をさけ資本蓄積をおこなわなければならない。資本は、生産的労働を雇用する一種の「社会的ファンド」といってもよいが、それはこうした所有者の私的利害関心によって最も有効に守られるのである。

つまり、スミスにとって特徴的なことは、〈資本〉がまず生産過程の遂行に役立つストックとして素材的に捉えられていることである。〈資本〉は所有者のある私有財産ではあるけれども、基本的には、生産部に存在する継続的で固定的な「社会的ファンド」とみなされ、ただ「収入」（利潤）となる部分だけがそこから流出するものとされている。利潤を獲得しようとする所有者の私的利害関心が、〈資本〉の継続的な維持・蓄積と合致するものとされるからである。したがって、市民的な法秩序を確立し、財産としての〈資本〉の安全と将来の収益の保障をヨリ確実にして、節約による資本蓄積の道の障害を除去することが国家の課題とされたのである。

こうしたスミスの資本把握にマルクスのそれを対置してみると次のようになるであろう。

M1. 〈資本〉は、運動をつうじて自己増殖する価値である。それはまず流通過程において「資本の一般的範式 $G-W-G'$ 」のもとにあらわれるが、そこに出現する剰余価値（利潤 ΔG ）の源泉は生産過程に求められるべきである。

M2. 〈資本〉は、生産手段と労働力を市場で購売することによって生産過程を支配する。生産手段をもたない労働者は、資本家の支配下でなければ労働できず、生産物も資本家のものとなる。剰余価値の実体は、こうし

た生産において搾取される剰余労働にある。

M3. 資本家的生産は、商品生産として本質的に無政府的であり、また、剰余労働搾取の生産関係は敵対的である。したがって、資本蓄積の進展は資本家間の競争を激化させるだけでなく、労働者階級の窮乏の増大、恐慌を含む動揺の増大を生み出す。

こうした対比から明らかになることは、スミスが生産過程を支えるストックとしてまず把握した生産的資本を、マルクスは自己増殖する価値の運動に包摂されたものとして把握したということである。生産的資本は、貨幣資本の転化した生産手段および労働力として位置づけられ、スミスにおいて生産過程に固定されていたストック（生産手段・消費手段）は流通部面（ $W'-G'$ ）という価値的なフローの世界に引き出されている²⁾。この自己増殖する価値の運動の基礎形態が、 $G-W-G'$ ($G+dg$) と表現され、それが生産過程を包摂した形態が $G-W (A, Pm) \dots P \dots W'-G'$ となることからわかるように、マルクスにとって、資本のこの運動を主導する形態は貨幣資本であった。いいかえれば、古典派との対比の上で、彼の資本把握を特徴づけるのは、貨幣的形態における資本の主動性の認識である。したがって、素材ごと、過程の進行局面ごとの特殊性をもち続ける生産資本、商品資本を貨幣資本循環がどのように支配するかが、彼の資本理論の主要内容になるはずである。

〈生産を支配する所有〉としての資本には、生産過程を組織する機能とその成果を領有＝総括する機能があると考えられるが、マルクスにあっては、この二機能の資本主義的特質は、貨幣的形態において資本を把握することにより、より鮮明になっている。

前者の機能についていえば、スミスにおいては、生産過程（分業）がそれ自体として説明された上で、生産的労働者が必要なストック（生産手段および生

2) 生産過程の機械化・高度化を重視したマルクスが、資本をストックというよりはフロー・モデルで把握している点は、一つの矛盾とも考えられるかもしれない。しかし、私は、それを、資本主義的な資本理論の本来的な課題を示すものと見たい。

活資料)をもちあわせず、他人所有のストックに依存する場合として資本制的生産が論じられる。資本による生産過程の支配の程度はまだ低く、そこには、まだ独立生産者的な表象が忍び込む可能性が残されている。それに対して、労働力そのものが資本(貨幣)によって購買=支配されるものとみなすマルクスにあっては、生産過程の組織化は生産手段および労働力の双方を購買し適切に組合せて配置する資本の権能である。生産過程自体の中にはいりこんでの指揮・監督の役割も無視しえないとはいえ、生産過程組織化の本質的部分は、既に特定の技術体系・知識・技能を体現している生産手段および労働力の購買=支配行為そのものにあるといつてよい。

後者の機能についてみると、スミスにおいては、私的に領有されるのは実質的には利潤=収入部分だけであり、それ以外の部分(資本)は、私的所有には違いないが同時に「社会的ファンド」でもあるものとして捉えられている。私的所有と「社会的ファンド」が両立しうするためには、所有者=資本家が将来の自分の利益を展望しうるほどに賢明であるという条件が必要であったのであるが、ともかく、この条件がみたされるかぎりには、資本は生産過程にとどまるストックでありつづけ、私的に支配されるのは、そこから流れ出る収入部分だけであった。こうした区分は、〈資本〉を、あたかも果実を生む木のように、収入をたえず生みだす枯れることのない源泉とみなす表象に容易に結びつく。それに対して、流通過程を主軸とした価値的フローの運動として資本を把握したマルクスにあっては、資本と収入についてのそうした区別は存在しない。所有者としての資本家にとっての〈資本〉の実体は投下された貨幣額であるが、選流してくる貨幣額に影響を及ぼす生産および流通過程の停頓は、収入どころか、元本としての資本そのものにもひびくのである。逆にいえば、彼にとって問題なのは、地主のように収入(地代)を継続的に獲得することではなく、全体としての資本の価値増殖 $G \cdots G'$ である。そして貨幣形態での資本は、全体として私的に領有・処分可能なのであって、生産部面を変えることも、またそもそも生産過程から引き上げることすらも可能な形態なのである。

私的所有としての〈資本〉の運動が、スミスの世界のように生産的労働者の雇用の確保をもたらすのではなく、不安定で悲惨な労働者状態をもたらすというマルクスの議論を組立てるには、もちろんまだいくつかの道具立てが必要である。しかし、いま見たように、生産を支配する所有としての〈資本〉をより動的にまた全面的に把握したマルクスの視点は、その出発点からして、スミスのな OPTIMISM を問題外とするものであったことは明らかである。

しかし、スミスのな STOCK を価値フローの世界にひきだし、貨幣資本という形態において〈資本〉を認識したことは、同時に新たなより根底的な問題につながらざるをえない。それは、運動する資本でありながら同時に誰かの私有財産であるということがどのようにして可能か、ということである。問題は、二重である。まず、現実的には、貨幣という形態でたえず復帰する資本価値は、現実にはふたたび運動に投じるのでなければ、貨幣資本たりえないということである。しかし、貨幣形態における資本は、運動＝循環においてそれをみれば〈資本〉であるが、静止的にそれをみれば貨幣資産であり、運動＝循環を終結する資本形態でもある。したがって、所有者的な利害関心が、運動の停止して財産価値の保全に向かう可能性を否定することはできないのである。つぎに、観念的には、運動過程における資本は現実には貨幣形態をとっていないにもかかわらず、その資本所有が貨幣的に——観念的に貨幣資本として——評価されなければならないということである。G…(P)…G' という循環の範式をとって、生産過程にある資本 (P) を所有する価値は、G なのか、G' なのか、それともさらに別の価値なのか、というようにも問いかけてもよい。過去の投下価値 G ではないであろう。マルクスも良く知っていたように、「資本としての貨幣または商品の価値は、貨幣または商品としてのそれらの価値によってではなく、それらがかれらの所有者のためにうみだす剰余価値量によって規定されている。」〔長谷部文雄訳『資本論』青木文庫⑩ 504ページ〕生産活動が利潤の獲得を目的としておこなわれるかぎりには、資本の価値は、それがもたらす将来の利潤フローをもとに評価される。支配的な利子率を基準とした「資本還元」の操

作によって成立するこうした資本価値は、資本のストックとしての価値の観念的復活である。しかし、それは過去ではなく将来の利潤の期待にもとづくものであるから、現実には還流してくる貨幣フロー（G）と一致するとはかぎらない。

マルクスの資本把握においては、所有の問題はかくして、現実のおよび観念的世界の双方において、一種のズレとでもいうべきものを経済理論の中にもちこむことになる。資本は、その現実の貨幣的形態において、循環から引き上げられ貨幣資産として滞留する可能性をもつが、他方、所有としての資本の観念的評価においても、現実の貨幣資本の投下・還流と乖離する可能性をもっているのである。このズレは、所有者の利害関心が資本運動のなかに浸透し、影響を与える水路を示すものであろう。そしてこのズレは、そこに成立する貨幣および資本市場を通じて社会性をもつものとなり、資本の生産的活動やその蓄積（投資）にも影響を及ぼすであろう。貨幣資産という形態において現れる近代の私的所有の特性と問題性は、資本運動の中にもはいるのである。

スミスを代表とする古典派経済学においては、資本を排他的に生産資本から把握しようとしているため、こうしたズレの存在が無視されたのである。生産的に投下されたものだけが〈資本〉であるから、問題は、生産的資本投下がおこなわれるかどうかだけであって、それは社会の一般的状態や国民の気質といった社会学的あるいは経済理論外的要因によって説明されるのである。

III マルクスの資本家像

『資本論』初版序文でマルクスは、資本家の人格は、「経済的範疇の人格化」「一定の階級関係と利害関係の担い手」としてのみ問題にされると述べた。したがって、もし資本における所有が前節でみたように、それ自体が経済理論の内容をなすような複雑な問題性をはらんでいるとするならば、その所有者である資本家の像もけっして単純なものにはならないはずである。しかし、以下にみるように、「人格化された資本」としての「資本家」を論じる『資本論』のテキストは、こうした予想とはかなりのへだたりをみせている。それは一体

どう解釈すれば良いのだろうか。

A) 蓄積過程における「資本家」像

『資本論』で資本家の動機についてある程度まとまって論じられているのは、蓄積篇第22章「剰余価値の資本への転化」第3節である。この節は、標題に「剰余価値の資本と収入への分割」とあるように、剰余価値または剰余生産物の量が与えられているものとして、そのうちのどれだけを蓄積にまわし、どれだけを個人的消費にまわすかの決定は、所有者としての資本家の「意思行為」にまかされているという構図から出発する。それに対応して、所有者としての資本家の心中においては、所有の拡大=蓄積欲と所有の消費=享楽欲という二つの背反しあう欲望が存在し、両者が「ファウスト的葛藤」を演じるとされている。

しかし、こうした視角——所有者としての資本家に背反しあう「二つの魂」をみる——をマルクスが持ち出したのは、資本家の行動を理論的に説明するためではない。マルクスによれば、資本家を資本家たらしめるのは蓄積欲であって、消費欲ではないのである。「彼の行住座臥が彼において意志と意識とを賦与された資本の機能に他ならぬ限りでは、彼にとっては、彼自身の私的消費は彼の資本の蓄積からの盗奪たる意義をもつのであって、それは恰かも、イタリ一式簿記では私的支出が資本にたいし資本家の借方に現われるのと同様である。』『資本論』④ 922ページ]

資本家の蓄積欲に対するこの一方的加担は、マルクスの歴史的展望に結びついている。「資本家は、人格化された資本たるかぎりでのみ、一の歴史的な価値と、かの……歴史的実存権とを有するのである。そのかぎりでのみ、彼自身の暫時的必然性は資本主義的生産様式の暫定的必然性のうちに含まれている。だがその限りではまた、使用価値および享楽でなく、交換価値およびその増加が彼の推進的動機である。価値増殖の狂信者として、彼は顧慮するところなく人類を強制して生産のために生産させ、したがって社会的生産諸力を発展さ

せ、また、各個人の完全で自由な発展を基本原理とする高度な社会形態の唯一の現実的基礎たりうる物質的生産諸条件を創造させる。」〔同 921〕

しかも、この蓄積の追求は、単なる個人的な欲望ではない。それは「資本家の場合には社会的機構——そこでは彼は一個の動輪にすぎない——の作用である。さらに、資本制的生産の発展は、一産業的企業に投下される資本の絶えざる増加を必然たらしめ、そして競争は、各個の資本家にたいし資本制的生産様式の内在的法則を外的な強制法則として押しつける。」〔同 922〕「蓄積せよ、蓄積せよ！ これがモーゼの言葉であり、予言者の言葉である。」〔同 926〕

このように、歴史的使命を背負った蓄積欲が英雄的姿において描かれるのに対して、いま一つの消費欲の方は、小心で卑屈な姿に描かれている。それは、生活の楽しみを忘れて蓄積＝支配の拡大に没頭した資本家の英雄時代が過ぎ去った段階になって現れる「もののあわれ＝自己憐憫」にすぎない。「古典的な資本家は個人消費を、自分の職分に対する罪悪であり蓄積の『節欲』だと極印するのであるが、近代化された資本家は、蓄積を自分の享楽欲の『禁欲』だと解することができる。」〔同 924〕つまり、趣味と教養をもつようになった資本家は、蓄積を社会的に強制されているが、それを消費の可能性の断念であると未練がましくいいだてる、それがシーニョアらの「節欲説」であるというのである。資本家の消費行動は、王侯貴族のそれのように無邪気なものではなく、世間の目を意識し、営業上の計算をも潜ませた姑息なものである。マルクスの見方では、資本家の消費欲は蓄積欲に対抗する自律的な要因ではなく、資本蓄積の歴史的段階とともに変化する現象にすぎない³⁾のである。

このように見ていくと、「二つの魂」＝「蓄積欲と享楽欲とのファウスト的葛藤」というのは、蓄積過程における資本家の役割を「節欲」と捉えて、資本の利潤請求権を基礎づける「節欲」説をパロディ化した議論にすぎないことがわかってくる。しかし、いま私達が知りたいのは、マルクスはこうした批判＝

3) こうした皮肉な歴史的洞察は、後のシュンペーターのそれを想起させる。のみならず、両者はその主人公を、経済の変動機構の担当者と捉える点、その主導動機を無限の支配＝征服欲とみる点で共通している。〔『経済発展の理論』岩波文庫 上170, 234—248〕

解釈のうえにどのような経済理論を構想していたのかということである。そのように問いかけてみると、マルクスの筆は急にあいまいなものに見えてくる。

たとえば、資本家の利潤取得権を消費の抑制への代償とみなした「節欲」説は、利潤率の高低が蓄積－投資を左右するという含意をもっていたが、マルクスは利潤率のこうした機能を否定したのであろうか。これに対する回答は難しい。マルクスは、すぐ次の章の資本の労働力に対する需要を論じた節（23章1節）で、「利得の刺激の鈍化」による蓄積の減少について明言している。〔同962〕が、この刺激が利潤率によるものか、利潤量によるものかは不明である。

もちろん、こうした経済変動のメカニズムにかかわる議論を、『資本論』第I巻の次元で期待する方が間違いなのかもしれない。しかし、より根本的な問題として私が問いたいのは、マルクスは、生産された剰余価値の量を所与としてその分配を考えるというこの節の構図を是認しているのかどうか、ということである。この構図には、資本家の決定如何にかかわらず剰余価値を所与と想定する問題、さらにまた、資本家の決定にかかわるものを、新たに生産された剰余価値部分だけとするという難点が含まれている。「剰余価値」——貨幣形態では、 Δg ——の分割・配分以前に、彼の支配しうる価値——貨幣形態でいえば、貨幣資本——の資本としての投下という決定があるのであり、むしろ、こうした「剰余価値」の分配にかかわる決定は、生産を規定する資本投下の決定によって条件づけられているというべきである。

B) 「貨幣の資本への転化」と資本家像

このような疑問は、私達を『資本論』において資本家の人格が論じられる他の個所にみちびく。それはすでに示唆されているように、「貨幣の資本への転化」章である。『資本論』蓄積篇は剰余価値の生産を論じた諸篇に後続しており、生産過程の資本主義的編成の確立を前提しているとみてよいであろう。その意味では、生産的資本としてみるかぎり、そこには連続性の前提、あるいは要請が存在している。しかし、貨幣資本循環の視点にたつきがりは、循環が停

止せずに新たな循環にひきつがれるには、「貨幣の資本への転化」が、その価値＝貨幣の所有者の意思決定を媒介に、再度くりかえされるのでなければならない。それは、蓄積（生産された剰余価値の資本への転化）に比べて、第一には、今期生産された価値フローの処分というだけでなく、過去から継承された資本価値（ストック）全体の処分にかかわる点においても、より基本的な意思決定といわざるをえない。

しかし、ここにおいても、マルクスの資本家像は、問題領域が変わっているにもかかわらず、「剰余価値の資本への転化」章のそれと変わらない。マルクスは、ここでも、資本としての価値の自己増殖の可能性を、主として「使用価値」、つまり消費的富の享受と対立させて、前者に一方的に加担するのである。「この運動〔価値増殖を実現する資本の無限運動〕の意識的担当者として貨幣所有者は資本家となる。……使用価値はけって、資本家の直接的目的として取り扱われるべきではない。また、個々の利得もそう取り扱われるべきでなく、利得することの休まない運動のみがそう取り扱われるべきである。」〔同② 293〕というようにである。

たしかに資本が資本であり続けるためには、「利得することの休まない運動」が必要であろう。この運動が停止すれば、それはもはや資本ではない。しかし、それは「資本」という言葉の説明にすぎない。理論的分析の対象を資本主義的生産に設定し、それが使用価値を目的とした生産でも、あるいは一時的・偶然的な利潤追求活動でもないことを承認したとしても、それは資本価値の貨幣としての部分的あるいは一時的運動停止の否定にはつながらない。過程の進行が技術的な特性に規定される生産過程に対して、流過程には、そのような制約は存在しないのである。むしろ、貨幣形態での資本の一定の存在、およびその分量の伸縮は、資本制経済の動態の一部である。とすれば、マルクスの「資本家」の規定は、やはり一面的といわざるをえないであろう。問題なのは、資本価値を貨幣として保有するか、再度、流通に投じるとかということであるからである。

IV 「資本家」と「貨幣蓄蔵者」

このように所有者としての意思決定という視点から「貨幣の資本への転化」章を再読するとき、興味をひくのは、「貨幣蓄蔵者」という存在である。この人格はもしかすると、主人公（「資本家」）の一本調子をおぎなう重要な脇役であるかもしれないのである。テキストの表面の叙述においては、「貨幣蓄蔵者」は、「資本家」と同じ致富欲という動機をもちながら不適切にしか行動しえない、過渡的な存在である。「貨幣蓄蔵者は気の違った資本家にすぎないのに、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者である。貨幣蓄蔵者が、貨幣を流通から救出して価値の休まない増加を達成しようとするのに対して、より賢明な資本家は、貨幣をたえず繰り返し流通に委ねて達成しようとするのである。」〔同 293〕両者ともに「絶対的致富欲」という共通の目的をめざすかぎりでは、貨幣をもちあわせながら、それに働かせようとしない「貨幣蓄蔵者」は愚者でしかないように見える。

だが、「貨幣蓄蔵者」もそれなりの識見をもたないわけではない。「資本家」は貨幣を絶えず流通に投下して、またそれを貨幣形態で回収しようとしている。しかし、「[もしその結果がせいぜい同じ $G'=G$ にすぎないとすれば]自分の百ポンドを流通の危険にさらすかわりに握りしめている貨幣蓄蔵者の方が、なお遙かに簡単であり、確実であろう。」〔同 285、強調は八木による〕「資本家」の行動が合理的であるのは、それが利潤を実現する ($G'>G$) かぎりにおいてであるが、それは流通過程における価値減失の危険をとまなう上、複雑な操作を必要としているのである。この「流通の危険」の評価と必要な操作の費用の認識において「貨幣蓄蔵者」は「資本家」に十分に抗弁しうるであろう。だが、その一方で、貨幣を死蔵するだけで増加させることができなければ、彼はマモンの従者としては叱責を受けることを免れないだろう。

このように、「貨幣の資本への転化」という問題領域において「貨幣蓄蔵者」に照明をあててみると、一つの問題が浮かびあがってくる。それは、自ら

の財産を貨幣形態のまま他人への貸付によって増加させようとする事(G-G')は、ここでいう「資本」に入るのかどうか、そのような行為をおこなう人は、「資本家」なのか「貨幣蓄蔵者」なのか、という問題である。

もちろん、マルクスはこうした貨幣の運動形態をさして「貸付資本」「利子生み資本」という用語を用いている。それは、価値の増殖を実現するという点においては、たしかに「資本」である。しかし、二人の人間の間の貨幣のやりとりは、それをケインズのように「金融的流通」とよぶのは許されるとしても、それは、「貨幣の資本への転化」章でマルクスのいう「流通」(商品流通)とは異なったものである。G-G'はたしかに「資本の一般的範式」G-W-G'の両端をとった「簡潔体」[同 297]ではあるが、貸手の側での操作をみるかぎりでは、あいだにWははさまっていないのである。したがって、もし「貨幣蓄蔵者」に対する「資本家」の差異を、1) 流通(生産を含む)における価値変動のリスクをひきうける、2) 流通過程(および生産過程)の組織化を担当する、という二点にもとめるとすれば、貸付けられる貨幣の貸手は、そのままでは、「資本家」とはよべないといわざるをえない⁴⁾。

他方でマルクスは、G-G'という行為を「貨幣蓄蔵者」の延長においても考えようとしている。但し、彼はそれを、「高利貸し」という前期的な形態において捉えており、そこには理論的な混乱があるように思われる。「貨幣とともに必然的に貨幣蓄蔵があらわれる。しかし、職業的な貨幣蓄蔵者は高利貸しに転化するとき、はじめて重要となる。」「同 837」「貨幣蓄蔵は高利においてはじめて現実化され、その夢を実現する。蓄蔵貨幣所有者によって要求されるものは、資本でなく、貨幣としての貨幣である。だが彼は、利子を通して、この蓄

4) 私は貨幣貸付 G-G' は、〈貨幣の使用価値の時間ぎめの販売〉であるから、それだけでは「資本」の運動形態とみなすのは適当ではないと思う。これは、マルクス経済学においては、かなり異端的な見解に属するかもしれない。しかし、私は金子甫「資本家の分解と利潤の分裂」『桃山学院大学経済学論集』11-3(1969)の批判は説得的であると思うし、また、中野正『産業循環論』日本放送出版協会(1965)の貨幣コストとしての貨幣利子論という着想が発展させられなかったことを残念に感じる。しかし、いうまでもないことだが、こうした領域において「銀行資本」のような資本主義的な「生産者」が成立しうることを否定するものではない。

蔵貨幣を自分のために資本に転化する。」〔同 844〕

マルクスが「高利貸付」を「貨幣蓄蔵」の延長においているのは、その貨幣が借手の手においても、「資本」としてというより、貨幣として、つまり、流通手段、あるいは支払手段として機能するからであるようである。しかし、貨幣が借手の側でどう使用されるかは、借手の事情であって、貸手としては、それには関知しないはずである。貸手が「貨幣蓄蔵者」であるとすれば、彼が関心をもつのは、むしろ、彼の富を貨幣形態でそのまま手元におくことであるはずである。しかし、資本制生産を前提しない「高利貸付」においては、貸倒れの危険がきわめて高く、債権の保護も十分でなく、その取立のためには多大な労力が必要とされる。したがって、それは、貨幣取引という一特殊分野における「資本家」的活動の可能性を予告するものではあっても、資産の貨幣価値を確保しながらその増加をはかろうとする「貨幣蓄蔵者の夢」の実現ということとはできない。先の二つのメルクマールを否定しながら、貨幣的資産の自己増殖を実現しているのは、むしろ、銀行に預金したり、確定利付き有価証券を購入したりする近代的な資産保有者（「金利生活者」）である。

したがって、 $G-G'$ を「貨幣蓄蔵者」の行為＝取引とみうるためには、貨幣的資産自体に一種の二重化が成立しているものでなければならない。貸手である本来の貨幣所有者にとって、その債権がそれ自体として確定的な財産価値をもち、欲をいえば、それ自体として一定の流動性をもつことである。つまり、貨幣それ自体としては借手にその使用を委ねてはいるが、他方では貸手自身の手元においても、潜在的に貨幣的な性格をもった資産（金融資産）が残されているということである。マルクスが近代的な「貸付資本」あるいは「利子生み資本」というものは、こうした貨幣資産の二重化によって運動可能な形態になった「蓄蔵貨幣」と捉えるべきではないだろうか。

このようにみていくと、「貨幣の資本への転化」というのは、貨幣形態の資産をめぐる「資本家」としての行動と、「貨幣蓄蔵者」としての行動が交錯する問題圏域だということになるのであろう。それは、「資本」所有者の人格

における主観的な選択の問題であるだけでなく、資本循環のこの部面において、社会的総体としても、資本制の商品流通と貨幣の貸借関係（貨幣市場）が交錯しているということでもある。そうした社会性を反映した指標が、利子率に他ならないであろう。

V 結びにかえて——資本における二重化の展開

前項で私達は、「貨幣蓄蔵者」に焦点をあてて「貨幣の資本への転化」の側面照明をおこなおうとしたが、いうまでもなく、「貨幣蓄蔵」のこうした運動に経済的内容を与えるものは、「資本」の側である。「貸付」が所有権と債権の二重構成になることの指摘は、経済学をまつまでもない。それは、それ自体としては法学的な形式にすぎず、いまみただばかりの「高利貸付」は、まさにこの形式が貸手—借手の相互の個別的特殊性をいれるだけで、社会性がそこに浸透していない形態であった。それに対して、近代的な「貸付資本」においては、基礎に資本の一般的利潤率において、利子率が貨幣市場で決定されるように、この二重性は資本主義的な所有の社会性を表現する形態でもある。

むしろ、こうした貨幣資産の二重化を現実的にうみだすのは、「資本」の側での「所有」に本質的に含まれる観念的および現実的二重化の進行であるというべきであろう。「観念的二重化」というのは、資本がその循環において変態する各種の具体的形態にもかかわらず、それが観念的に何らかの貨幣価値で表現されなければならない（企業会計を考えよ！）ということであり、また、「現実的二重化」というのは、循環としてみれば一体であるはずの「資本」が、生産過程にある資本と流通過程にある資本（貨幣資本・商品資本）に分離するということである。前者における「二重化」は、資本所有の価値評価がその予想収益を基礎におこなわれることによって発展し、後者における「二重化」は流通過程における「資本」の自立化（商業資本および貨幣取扱資本）によって発展する。そして、このような動態的な「資本」の側からの二重化を基礎として、静態的な「貨幣蓄蔵」の側での二重化もその経済的な規定性を持ち、「不

生産的」な要素もはらんでの相互の交錯（金融市場）そして影響が可能になるのである。

紙幅にかぎりのある本稿では、こうした「資本」および「資本所有」の二重化の展開と、その「蓄蔵貨幣」あるいは貨幣的資産との関連について詳論を試みることはできなかった。しかし、以上のような展望にたち、『資本論』第Ⅲ巻第5篇をも射程においてマルクスの資本理論を考察するならば、マルクス体系を Property matters¹の理論体系として見直すことも、あながち無理とは思えない。——『資本論』においては、資本制経済の基本カテゴリーを秩序だてて本質論的に叙述するという先立つ課題のために、資本制経済の運動機構 *modus operandi* を論じる視角は後退しているむきがあることは否定できないとしても。——本稿は私自身にとっても、そのような問題提起であり、課題を後に残すものであると観念して筆をおくことにする。